

勉強会は何を生み出したか？ 勉強会を支援する側から

■ 文：曾我一弘（青山メディア研究所）

今、企業が勉強会を支援する意味

ソフトウェア開発などを手がける企業やインターネットサービスを展開する企業の中には、勉強会を大いに奨励し、支援をしているところがある。なぜそれらの企業は、勉強会を支援するのか？ 本セクションでは、勉強会を支援している企業の方にお話を伺いながら、勉強会を支援する理由やその成果、そして勉強会の未来について解き明かしていきたい。

今回のインタビューでは、実際に勉強会を率先して主催している(株)ミクシィの津久井玲宏氏と、エンジニアが 세미나や勉強会を行う環境作りを統括している日本マイクロソフト(株)の荒井一広氏、そして、勉強会を積極的に推進している経営者である(株)オープンストリーム代表取締役社長 佐藤浩二氏に、それぞれの視点から話を伺った。

勉強会に参加しているエンジニアの技術力は高い

今回インタビューした企業であるミクシィはソーシャルネットワークサービスを提供している。日本マイクロソフトはソフトウェアベンダである。オープンストリームは自社のサービスを展開しているシステム開発会社である。これらの企業は、当然のことながら、企業としての方向性は異なっている。しかし、勉強会を支援している彼らは一様に同じことを言う。

「勉強会に参加しているエンジニアの技術力は高い」

それは、定量的な数字として表現することはできないものの、それぞれが異なる立場から見て、同じように感じているのである。勉強会には、高い技術力を持ったエンジニアと技術情報が存在していると

津久井玲宏

(株)ミクシィ
サービス本部 コアサービス部
開発グループ マネージャー



荒井一広

日本マイクロソフト(株)
ディベロッパー & プラットフ
ォーム統括本部 オーディエン
スマーケティング部 部長

佐藤浩二

(株)オープンストリーム
代表取締役社長



言える。つまり、勉強会を語らずに、今のエンジニアや技術について語ることは、できないと言えるかもしれない。

そんな彼らが勉強会を知ったきっかけとは何だったのだろうか？

(株)ミクシィの津久井氏(以下、津久井氏)は、「もともと、私自身が Shibuya.pm (通称:シブヤピーエム) という勉強会に参加したのが、勉強会に興味を持ったきっかけですね」と言う。Shibuya.pm は、渋谷に Perl を主言語とする企業が多かったことから生まれた勉強会だ。技術的な観点から、勉強会に参加したのがきっかけである。

日本マイクロソフトの荒井氏(以下、荒井氏)は、「私は、異業種交流会や技術系のコミュニティ、日本 Windows NT ユーザ会など、周囲に勉強会や交流会があり、気づいたらいろいろと参加していました」と言う。最初に参加したのは、10年ほど前で、まだ社会人になったばかりのときだったそうだ。

オープンストリームの佐藤氏(以下、佐藤氏)は、「私の場合は、社内の若い世代のエンジニアが技術力を高めたいということで、勉強会に参加していたり、主催したりしたいという提案をもらい知ったのがきっかけです」と言う。

お分かりだろうか。キーワードは、若い世代である。

今の若い世代においては、勉強会に参加するという選択肢が当たり前になりつつある。そしてそれ

は、今はじまったことではなく、すでに10年前から脈々と続いているのである。

その中心はエンジニアと技術

そもそも勉強会は、業務時間外の活動である。そのような業務時間外の活動である勉強会に対して、企業が支援する目的とは何であろうか？

津久井氏は、「ミクシィが勉強会を開くのは、エンジニア同士の交流を通して、エンジニアの技術の底上げを行うと同時に、ミクシィで働くエンジニアのプレゼンスを向上するという狙いがあります」と語るように、企業で働くエンジニアの技術向上が狙いだ。

また、荒井氏は、「現在、ITプロフェッショナルの方というのは、全国で200万人ほどおります。そのような方の中には、我々のテクノロジーを使ってみたいという方や、勉強してみたいという方が、いらっしゃいます。そのようなときに、場所やプロダクトの貸与を行っています」と述べ、エンジニアの支援のために、勉強会の支援をしているという。また会社として、勉強会の内容には干渉せず、主催者の主体性を尊重しているそうだ。

「これは、ソフトウェアを販売して、そこで終わりという時代ではなくなってきているためです」と荒井氏が語るように、技術を学ぶスタイルが変化してきていることの表れかもしれない。

また、佐藤氏は「もともと、エンジニアの人は内向きなので、会社として外のエンジニアと積極的にかかわることを推奨しています」と語り、エンジニアのスキル向上として、勉強会を支援しているそうだ。加えて「私としては、自発的に勉強会を開催してもらえるのは、ウェルカムです。また、開催するのであ



勉強会に参加することで、
切磋琢磨して
伸びています

れば、ぜひ自社で行ってもらいたいと思っています」と、勉強会についてかなり積極的だ。

これはどの企業においても、その中心にあるのが、エンジニアと技術であり、だからこそ、勉強会を支援していると言えるだろう。裏を返せば、エンジニアと技術が中心にある企業や組織にとって、勉強会は無視できない存在になっていると言えるのではないだろうか。



佐藤氏いわく「勉強会は、技術の筋トレ」

企業が勉強会に注目し、推進していることは分かった。

しかし、企業が利益を追求する組織である以上、利益という観点はずせない。実際に勉強会を支援することで、直接ビジネスの成功に通じているのだろうか。

津久井氏は「実際に企業として直接的な利益を表現するのは難しいですね」と、率直に語ってくれた。しかし、エンジニアの技術力の向上という観点では、大いに貢献しているという。

また、荒井氏は「コミュニティの方というのは非常に熱心で、技術力もある方が多くいらっしゃいます。そのような方が、TwitterやFacebookなどを通して、意見を書いていただけることが、貴重な資産だと考えています」と、技術情報を広めるインフルエンサーとして企業にプラスになっていると言う。さらに、「企業として、有形の資産も大切ですが、中長期的な視点で考えたとき、無形の資産も大切だと我々は考えています。そのひとつが人材です」と荒井氏は述べているように、中心に考えているのはエンジニアという人材なのである。

佐藤氏も「直接的にプラスというのはありませんが、エンジニアの技術力のベースアップや技術の幅

広さにつながっていますね。私としては、勉強会やセミナーなどを通して、直接的にビジネスをしようとは考えていません」と語り、はっきりとエンジニアの技術力を中心に考えている。その理由として「例えるなら、勉強会というのは筋トレです。足腰を強くしなければ、実践で戦うことが難しいですから」と佐藤氏は語る。

まさに、筋トレとは、的を射た言葉と言える。一流のスポーツ選手においても、日々の積み重ねた練習がなければ、実際のプレイの際に、イメージ通りには動けないからだ。また、多くの新たな試みは、地道な練習を行ったからこそ、実践で試すことができ、成果がでるとも言える。ぶっつけ本番で、うまくいくという例は、あまりないだろう。

このようにして見ていくと、勉強会を支援する企業が中心に考えているのは、エンジニアということが分かる。

どの企業においても、勉強会によって直接的な利益はないものの、エンジニアの活動を支援することによって、有形ではない無形の資産として企業にプラスの効果をもたらしているのだ。

津久井氏いわく「勉強会に参加することで、切磋琢磨して伸びています」

実際に、人材育成という観点では、「100%プラ



スに寄与していますね。今の若い人は、外の技術を吸収しようとか、外のエンジニアと交流しようといった意欲が強いです」と津久井氏は語る。これは、一般的な若い人に対するイメージとは少し異なるかもしれない。さらに「勉強会で知り合ったエンジニアと仲良くなり、仲間意識やライバル意識をお互いに持っている方が多いと感じています。勉強会に参加することで、切磋琢磨して伸びていますね」と続け、エンジニアが自発的に自分の力を伸ばしている点を強調する。

また、荒井氏は「弊社では、各製品のユーザ会やエバンジェリストのコミュニティまで、それぞれの分野に強い人が集まって、情報共有をするという勉強会のスタイルが当たり前が存在しています」と言うように、日本マイクロソフトでは人材育成という観点で、勉強会を有効に活用しているようだ。加えて「社内の教育でカバーできる部分というのは限られているので、外からの知識を吸収しないと、新たに広がっていくことはありません」と述べ、外のエンジニアとの交流が大切だと言う。

佐藤氏も「コミュニケーションを鍛える場として、勉強会は効果があります」と語り、組織として必須のスキルであるコミュニケーションスキルの修練に勉強会が役立つという。また、「勉強会の準備や勉強会の進行、ファシリテーションなど、普段の業務にはないスキルを磨くにも良い場です」と言葉を続

け、技術以外のスキル向上にも注目している。これは、社内教育だけではなかなか身に付きにくいスキルではないだろうか。

このように、勉強会はエンジニアの人材育成の一部分を担っていると言えよう。いや、正確に言えば、社内教育で伸ばすことが難しいスキルを勉強会が補っているという表現が正しいかもしれない。

社内で大事に囲うように育てていくよりも、外に出て外部のエンジニアと接した方がより効果があるというのは、これまでの育成スタイルから考えると、逆の発想ではないだろうか。

こうして見ていくと勉強会は、エンジニアの交流だけでなく、技術力を含めた自分のスキルを向上させるのに最適の場であると言える。

勉強会は新たなプロダクトのタネ

積極的に勉強会に参加するエンジニアたちが集まれば、新たなプロダクトが生まれてもおかしくないだろう。

実際に「Perl イベントのために作ったプロダクトが、Web サイトが公開され、ソースが公開され、多くの人に使われている例がいくつもあります」と津久井氏が述べているように、生まれたプロダクトをすべて把握するのは難しいかもしれない。そしてこれは Perl に限った話ではない。

また、荒井氏は、「勉強会などが元になって、弊社のプロダクトを中立的な立場で、評価して、書籍などで書いていただけたりしています」と語る。確かに、技術書籍の中には、ユーザ会などが主体になって書かれているものも多い。特に、企業にとって、中立的な立場で技術について評価をもらえるのは、大きな財産と言える。

また、勉強会を通して実際にソースコードが生み

3 勉強会は何を生み出したか？ 勉強会を支援する側から



出されている例もある。佐藤氏は「ソースコードの大会を開いて、皆でレビューなどをしたのですが、そのときには若いエンジニアが優勝しました」と言う。さらに、「実際に講師の方を頼んで、ゲームの企画から、ビジネスの中身までを勉強するソーシャルアプリの勉強会を開催したこともあります。実は、今提供している『会社×彼氏』のゲームは、そこから生まれたプロダクトです」と語り、勉強会自体が、新たなサービスや技術のタネになっているのだ。

このように、さまざまなプロダクトが生み出されている勉強会が、日々、日本全国津々浦々で行われている。そこでは日々、何かが生み出されているのである。

これは、プチイノベーションが、毎日起きていると言えるかもしれない。これほど、エキサイティングなことがこれまであっただろうか。そして、これが今の日本で起きている現実なのである。

勉強会にデメリットはない

ここまでは、勉強会のメリットばかりを紹介してきたが、実際にデメリットはあったのだろうか。

津久井氏は「勉強会を開催してみて、トラブルは特にあり

ませんでした」と述べ、大きなトラブルはなかったという。

また、荒井氏も「勉強会自体のトラブルはありませんね」と同じ意見だ。しかし、「ただ、日本人の場合、勉強会に興味を持って、既存の勉強会に参加しにくいという方もいると思います。それは、遠慮なのかもしれませんが、今後勉強会が広がっていく中で、そのような敷居が下がっていくと良いと感じています」と、勉強会自体ではない部分で心配はあるという。

また、佐藤氏は「技術者ですから、最終的な目的は一緒でも、作法が違うという点で意見がぶつかることはあるとは思いますが。ただ、デメリットというのはありませんね」と語り、多少のトラブルがあったとしても、目指している方向性が同じであるため、大きな問題にはならないという。

心配している点で言えば、「難しいのは、ワーキングバランスだと思います。勉強会に参加するには、ある程度の余裕がないと参加できませんので」と、業務と勉強会のバランスが大切だと強調する。

実際には小さなコミュニケーショントラブルはあったかもしれないが、目に見えて大きなトラブルはほとんどないのが現状だ。

これは、そこに集まるエンジニアたちの目的が明確であるからだろう。

それは、技術である。日本が技術立国を目指しな



がら、さまざまなしがらみや足の引っ張り合いで、いまだに実現できていないことが、勉強会ではいとも簡単に実現できてしまっているのだ。それは、参加者すべてが見ている方向が同じだからではないだろうか。

技術が好き、技術が楽しい。そんなシンプルな思いが根底にあるからこそ、トラブルがほとんど起きないのだろう。

勉強会の本質、それは「リアル」

このように、勉強会はメリットが多い。今後も勉強会は各地で開催されていくだろう。

「エンジニアのリアルな交流としての勉強会は、今と変わらず、同じスタイルで続いていくと思います」と津久井氏が言うように、リアルな交流という点で、勉強会は地位を確立しつつある。

また、荒井氏は新たなスタイルとして、「ライブミーティングなどを使って、異なるロケーションでも勉強会に参加できるようになるかもしれません」と語りながらも、「ただし、人と人が Face to Face でしか得られないこともあります。今後は、参加の選択肢は増えていくが、今と変わらない部分もあると思います」と、人と人とのリアルなつながりの大切さを指摘する。最近では Twitter や Ustream（ユーストリーム）で中継している勉強会も増えてきて

おり、確かに勉強会への参加の方法は多様化しつつあることも確かだ。

さらに佐藤氏は、技術的な観点と開発の観点から2つの新たなスタイルが生まれると言う。まず、技術的な観点から、「これからのシステムというのは、レガシーな技術と新しい技術の混在環境になっていくと思います。そのときに、古い技術を知る必要が出てきますよね。その古い技術を知る場を勉強会が担うようになると思います」と新しい技術と古い技術の交流の場になると予見する。さらに、開発の観点からは、「たとえば、お客さんとの勉強会を通して、実際の開発に入っていくという開発スタイルが生まれるのではないのでしょうか。発注や納品などの業務上の課題もありますが、お客様と一緒に成長していくような勉強会のスタイル、開発のスタイルが生まれるのではないのでしょうか」とアジャイル開発の進化型を予見する。そして、勉強会がビジネスの中心になる可能性もあると言う。これは、興味深い話である。

このように勉強会のスタイルについては、さまざまな視点がある。しかし、共通している点が1つ存在している。それが「リアル」だ。

インターネットが発展し、Twitter や Facebook、メールなどさまざまなツールが生まれ、便利な世の中になった。知識を簡単に得られる時代になった。しかし、リアルという点は、今後も残っていくというのだ。

もしかすると、デジタルネイティブと呼ばれる若い世代が積極的に勉強会に参加するのも、そこにリアルがあることが理由なのかもしれない。そこに技術のリアルを感じているのかもしれない。

積極的に外に出て、交流するというリアル、そこに新しい技術が集まっているというリアル、そのリアルさが勉強会の本質ではないだろうか。



古い技術を知る場を
勉強会が担う

勉強会に参加して、感じてほしい

最後に、勉強会に参加を考えている方へのメッセージをいただいた。

津久井氏「ぜひ一度勉強会で発表していただき、発表する楽しさ、アウトプットする楽しさを経験してほしいと思っています」

荒井氏「Tの字型のスキルではないですが、発達発展の早い分野で、幅広い知識が求められています。決まり切った世界から飛び出していくことで、新たなイノベーションが生まれていくと思います」

佐藤氏「自分自身がプロフェッショナルとして光るためには、ゼロの状態から何か生み出していく必要があります。そのような意味で、勉強会は大変役に立つと考えています。ぜひ、積極的に活用してほしいですね」

発表する楽しさ、
アウトプットする楽しさを
経験してほしい



ぜひ、勉強会に一度足を運んでほしい。参加することで、新しい世界が見えることは間違いないだろう。そして、参加しているエンジニアの熱を感じてほしい。参加している人は、たぶん、貴方と同じように考え、何かを求め、その勉強会に参加しているのだから。

(平成 23 年 1 月 27 日受付)